

〈愛と苦悩と栄光と〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

今年二〇一七年は、近代彫刻の父、オーギュスト・ロダンの没後一〇〇年にあたる。それを記念して、「ポネット」などの名匠ジャック・ドワイヨン監督がパリ・ロダン美術館の全面協力によって、新しい角度からロダンの半生に光をあてた伝記映画である。

ロダンは、長い下積み時代を経て三〇代後半によくやく世に出たが、当時のサロンや批評家らには無視されがちで、モネやセザンヌらとともに「サロン落選組」仲間であった。ロダンが初めて国から大きな仕事の発注を受けたのは、一八八〇年、四〇歳のとき。それはパリに建設予定の国立装飾美術館の庭に置かれるはずのモニュメントで、ダントの「神曲」に材を取った壮大な「地獄の門」であった。

一年がかりでデッサンを起こし、粘土で造形を製作してきたが、どうにも構想がまとまらない。その頃、ロダンは

カミーユ・クロードと知り合う。彫刻家志望の一九歳。ロダンを最高の彫刻家と信奉し、意欲も十分で、何より驚くほどの美貌の主だった。才能をすぐに見抜いたロダンの愛弟子になり、ほどなく何人目かの愛人に。

カミーユに関しては多くの映像作品があるが、たとえば仏美人女優イザベル・アジャリー主演「カミーユ・クロードル」（一九八八年）では、身も心も師ロダンの捧げつくした挙句、ライバルの内妻ローズに破れ、師への疑心暗鬼から精神に異常をきたし、四八歳で精神病院へ送られ、そのまま後半生を終える悲劇のヒロインとして描かれた。

本作では、カミーユの描き方がよりロダン側の視点に立つ。たとえば、師に「地獄の門」についての意見を求められると、「地獄の門」は不道徳です。（彫刻の）人物が欲望に満ちています」と臆せず、ずばりと言っている。ロダンは

そんな潔いカミーユにますます惹かれてゆく。悲劇を、失意のカミーユが髪を振り乱して錯乱してゆく痛ましい姿でなく、ロダンが初めてカミーユの作品「嘆願する女」を息を飲んで見詰める姿で表現する。若い女が膝まずき伸ばした手の先にいる男を抱きかかえるようにして連れ去る醜い老婆―明らかに自分たちの三角関係を表現した作品だ。カミーユ役を演じるイジア・イジュランは、美人女優というよりもそのパワフルで激しい歌声が、ジャニス・ジョプリンの再来と称されるロック歌手で女優というところにも監督の狙いが現れている。

ロダンをめぐるローズとの争い、二〇代後半でロダンの子を中絶した心の傷、ロダンの成功と比べて自分の芸術上の焦り…煮詰まった心の内を爆発させたカミーユにロダンは告げる。「芸術家としての君は脅威だ。私など必要ない」。このひと言で愛は終わった。

カミーユは去るが、ロダンにはまだ代表作となる「バルザック記念像」制作をめぐる七年がかりの大問題が…。ロダンの作品は、教科書などでもおなじみだが、カミーユとの愛と苦悩を経てつかんだ栄光としてみれば、味わいもひとしおである。



『ロダン カミーユと永遠のアトリエ』

フランス映画 (120分)

監督：ジャック・ドワイヨン

出演：ヴァンサン・ランドン、イジア・イジュランほか

11月11日より新宿ピカデリーほか全国順次公開

© Les Films du Lendemain / Shanna Besson